



建築の諸実体

遠隔接触による自己の覚醒

1 研究背景と目的

本研究は日頃より漠然と心惹かれる存在であった“月”について考えるところから始まっている。月という存在は、私たちにとってその全てを知ることはいかなる不可思議で遠い存在である。しかし、同時に何か親しまれる存在でもある。一見すると矛盾するような二つの性質を同時に持ち合わせている状況は興味深い。

人々にとって建築が月のような存在であることはできないだろうか。

本研究では、まず月が人間に与える心的影響から建築へと変換可能なキーワードを探しだし、そこから月のように私たちの側にありながらもどこか妖しい魅力を持っているような建築を考えたい。

2 神々しさ、「崇高」

宇宙や大自然のような人知を超えた存在と対峙した時、湧き上がる強い感情は崇高なるものという表現がふさわしいように思う。崇高とはいかなる感情であるか、文献研究を行い明らかにする。なお本研究では、近代崇高論の立役者であるエドモンド・バーク、イマヌエル・カントによる崇高論を参考にした。

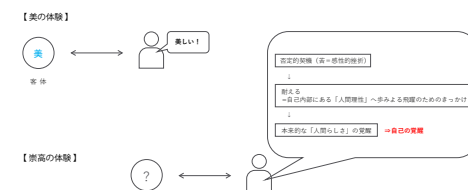
「崇高」のはじまり

桑島(2008)によれば、「最初に美的概念として「崇高」が登場したのは、紀元後一世紀ごろ書かれた文体論『崇高について』(Peri Hypsous)である。作者は長らくロンギノスと考えられていたが、実際には作者未詳とされる。これが「1674年になって、フランス古典主義者ニコラ・ボアローにより、フランス語に翻訳され」る。[1757年にエドモンド・バークが「崇高と美をめぐる我々の観念の起源にかんする哲学的探究」を世に問い」た。さらに、イマヌエル・カントによる「三批判書『純正理性批判』(初版1781年、改訂第二版1787年)、『実践倫理批判』(1788年)、『判断力批判』(1790年)」のうち『判断力批判』上において崇高なものの分析論が展開されているとされる。

2_1 崇高な体験起生のメカニズム

バークは「自己保存に属する諸感情は苦と危険に依存する」とし、「自己保存に属する諸感情は、あらゆる感情のなかで、もっとも強いものである」と述べている。そして「現実にはそのような境遇にいないで苦と危険を心に浮かべるとき、それらは歓喜となり、これを崇高としている。

カントは崇高の観念を美と対照させて説明している。「美」は、客体のもつ属性との直接的関係を契機にもたらされるので、その規定根拠を主体の「外」にもっている。一方、崇高は本質的には規定根拠を客体には求め得ず、主体の「内」で展開される生のダイナミクスのなかにその規定根拠を持つとされる。さらに、崇高は苦や感性的挫折と呼ばれる否定的契機に基づき、桑島(2008)の解説によれば、否定的契機(感性的な挫折=苦)に出会い耐えることが、逆説的にも自己の内部にある「人間理性」へと歩みよる飛躍のためのきっかけとなり、本来的な「人間らしさ」の覚醒がもたらされるという。つまり、崇高な体験の先に見いだされるものとは、自己の覚醒ではないだろうか。



パークやカントは崇高の観念を引き起こす要因として以下の事柄にふれている。

【E. パークにおける崇高を引き起こす要因として考えられている事柄】

・奇物 ・壮麗（マグニフィッセンス） ・困難（ディフィカルティ） ・無限（インフィニティ） 人工的な無限を構成するもの：連続性（サクセッション）と一様性（ユニフォーミティ）	・朦朧性 ・明確さ：暗く除去である ・容積の偉大 ・極端な小ささもある程度崇高 ・色：黒、茶、または、暗紫色などのような、沈んだ黒ずんだ色	・明るさ：暗く除去である ・極端な小ささもある程度崇高
--	---	--------------------------------

【カントにおける崇高を引き起こす要因として考えられている事柄】

数学的崇高	「絶対的に大なる数や量」「絶対的な大きさや多数性」 例）満点の星々のまたたく夜空、エジプトのピラミッドの巨大な外観など
力学的崇高	「絶対的に大なる圧力的な夜空」 例）急峻な岩山、電光・雷鳴をともなう雲のひろがり、暴風雨など 恐怖ないし畏怖心を惹起させる自然の威力

「遠隔接触」とはステイブンの『モノたちの宇宙』の中に出てくる言葉であるが、私見を交えてその意味を考えたい。私たちがあるモノの意味や機能を知り、全てを把握しているという気になっている状況を“直接的完全接触”とするなら、意味も機能もよく分からず、私たちはそのモノを決して把握した気にはなれないのだが、何か惹かれ感する部分がある時、それは“遠隔的な不完全な接触”とも呼べる状況が起こっているという事ができるのではないだろうか。

私は、建築と接触する時にはこのような“遠隔的な不完全な接触”が重要であると考える。

月は地上からその輪郭を捉えることができる。かたちも単純である。対象物として捉えることができるという点では太陽よりも近しさを感じる。月は私たちの内に対象化できる、ある再現可能性をもった存在であり、そのことが親近感にも関係しているのではないだろうか。

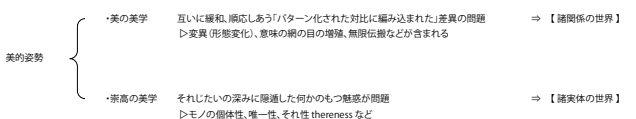
人が何かモノと関係性を結ぼうとする時、ある程度それを把握できることも重要であるようだ。よって本研究では秩序というものも一つの重要な要素として考えたい。

月が私たちに与える心的印象として崇高性が関わり、その崇高性は自己の覚醒に関わることが導き出された。崇高な経験を創出させるためには把握しきれないことが重要であるという仮説を立て、我々の認識の把握が及ぶような世界を「諸実体」とした。そして、人は諸実体との遠隔接触によって崇高なる体験、つまり自己の覚醒が起きると考えた。

ステイブン・シャヴィロ(2016)は『モノたちの宇宙』(上野訳)の中で、美的姿勢には、「美の美学」と「崇高の美学」があることを解いている。その中で美の美学は諸関係の世界に、崇高の美学は諸実体の世界にふさわしいとされている。ただし、これらは交互に繰り返される美的姿勢であるから、どちらか一方だけということではない。

私たちが魅了する美は、調和をもち、また同じように恐怖や謎といった量りきれない部分も持っているようだ。

本研究では、物として私たちがの前に立ち現れた時、その存在が心地よいだけでなく、どこかに量りかねる部分を待ち合わせているような建築を考えたいと思う。



・モダニズム建築

モダニズム建築の中には、単に単純明快で抽象的な空間性だけでなく得体のしれない物質感を帯びたような建築がある。ミースのパルセロナ・パビリオンはその一つである。水平垂直による強い秩序をもった構成要素に対して、大理石のもつ肌理は流動的で予測不能である。それは自然の象徴とも言えるべきものではないか。パルセロナ・パビリオンでは、この両者が一つの空間に存在するという不思議な不気味さ、物性の力が感じられる。パシユラールの言葉を借りれば、「幾何学が物質を限定したいと思う表面を飛び越えて膨張する力」である。

同じく近代建築を代表する建築家にルイス・カーンがいるが、彼の建築もまた物性の力を感ずる所がある。彼の建築には幾何学が多用されているが、コンクリートが充填された太い柱や厚い壁はずっしりとした量感がある。抽象的というより具象的で、力強い印象を受ける。どっしりとしたその姿は、長い間その地にある遺跡のようである。重量感のあることが私たちに不動なる感覚を与え、それが建つ地との深い結びつきを感じさせるのか。不動なる感覚とは、それ自身が膨大な時間を内包し、私たち人間が簡単にには到達し得ないような闇にその建築が在るという感覚にさせるのかも知れない。



左：パルセロナ・パビリオン（ミース・ファン・デル・ロエ） 右：パルセロナ・パビリオン（ミース・ファン・デル・ロエ）



左：パルセロナ・パビリオン（ミース・ファン・デル・ロエ） 右：パルセロナ・パビリオン（ミース・ファン・デル・ロエ）

手法として水平、垂直、まっすぐの「初等幾何学」に対し、そうでない流動的な有機的なものを「自然幾何学」とし、これらを同時に存在させることにより得体の知れない魅力を持った空間性を創出することを考えた。

スタディを行い、初等幾何学と自然幾何学がどのように存在すべきか検討を行った。

スタディより、対象物だったものが空間をつくる包摂物とつながっていくことで、見ているそれが対象物であるのか、包摂物であるのか認識の中で入れ替わりが起きる事が分かった。この時、私たちの感覚としてはつかみきれないという感覚が生じ、建築との遠隔接触につながる可能性が起きるという仮説が得られた。



・幾何学的なものの中に自然物のような有機的なかたちが置かれている。
・初等幾何学と自然幾何学が入り合い、自然世界の有機的な中に幾何学的な対象物があるという日常の環境から反転を起こしている。
・幾何学による人工物と自然物の描き分けが感ずる。



・四角から天井に伸びる道のようなものは直線が持つリズムから大きく逸脱する。意外性のある動きを見せることで四角に付随するものという以上に何者かになっている。流動的な動きとともに垂直の柱があることで、視覚的にどっち番かという状況を起こしているのではない。
・道にある柱は、柱に対しては細く屋根から伸びる自然幾何学を釣っているように見える。屋根を支えるための柱というような建築の機能に変換されないことも重要であるようだ。
・箱から垂直に伸びる柱は天井と接続する際、滑らかにつながることによって、ひと塊である物体感がでている。



・水平と垂直で構成された空間の先にそれを逸脱した道のような様相のものが見え、さらにその道の上に柱のようなものがある。上昇するこれを見をやっていくと、ぬじれながらいつの間にか天井に吸き取られてしまう。見ているそれは対象物なのか、それとも空間を包む包摂物なのか、不思議な感覚が生み出される。



・岩のような自然物に幾何学が貫入しているように見える。
・歩いていく中で包摂物とその先にある対象物としての空間の質にギャップが生み出される。
・四角の入り口から入っていくと、岩のようなモノクロのものに包摂される。しかし、その先に水平の屋根、垂直の柱といった幾何学的空間が見える。
・今、自分がいるところで経験している空間と、視覚で捉える空間にギャップが生じていることで、把握しきれないものが揺さぶられるという現象が起きる。



・三次元上で直交する二つの四角形の上面と側面に連なるように自然幾何学的形態が接続する。これにより、異なる高さにある四角は連なるものともなりはじめる。
・上方の四角から覗くと、下の四角の上面から伸びた流動的な自然幾何学が側面にふいに現れ、奇妙さが生まれている。



・箱を重ねたような典型的なビルディングタイプの様相であるが、所々で垂直な面がくぼんでいたり、自然物のようなものがぶら下がっていたりする。
・俯瞰的にとらえる視覚的な認識と、被験的な体験で捉える認識にギャップが生じている。認識を描き込むひとつ効果になり得るかもしれない。



・自然幾何学が箱型の初等幾何学を取り巻いているようである。初等幾何学に対し、自然幾何学の付属感が多少ある。
・描状のような外形は、自然幾何学と初等幾何学の違いがはっきりとして良いのではない。

【水平と垂直のつながり方の検討】



・水平要素(地面・屋根)と垂直要素(柱)がそれぞれ自律的である



・柱と屋根が滑らかにつながることによって建物の構成物に一体性が生まれる



・柱と地面が滑らかに繋がることで地面との一体性が生まれる



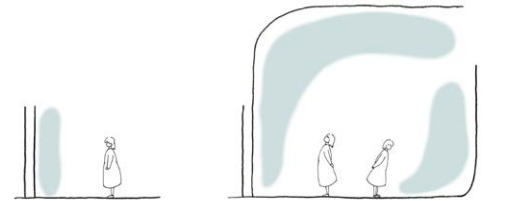
・柱と地面、柱と屋根がそれぞれ滑らかにつながり、屋根から地面までが一体となる

4 設計提案

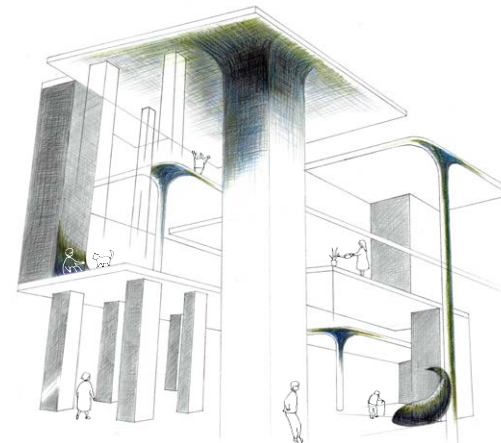
プログラムにシェアハウスを設定する。

空間自体が得体の知れなさを持つことで、異質な他者どうしが共に住まうという環境の中で余白や余裕が生まれることを期待する。

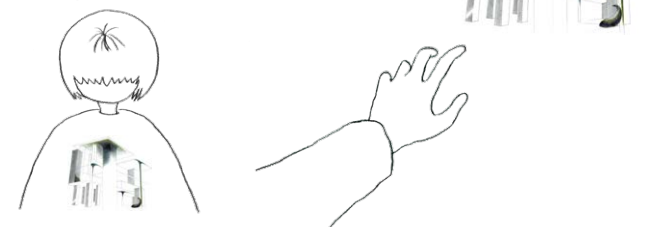
空間づくりのコンセプト

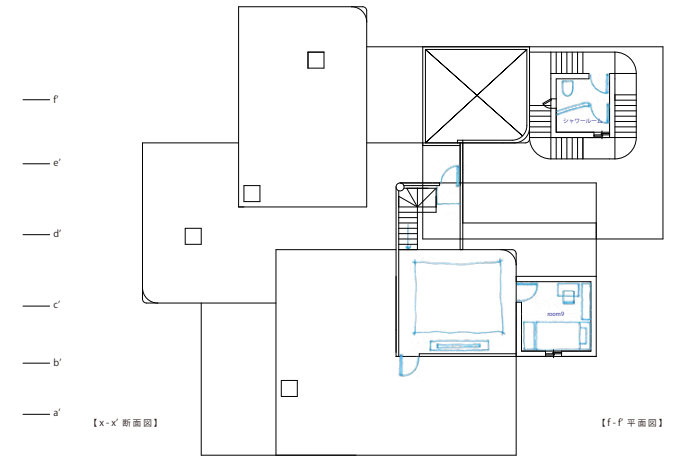
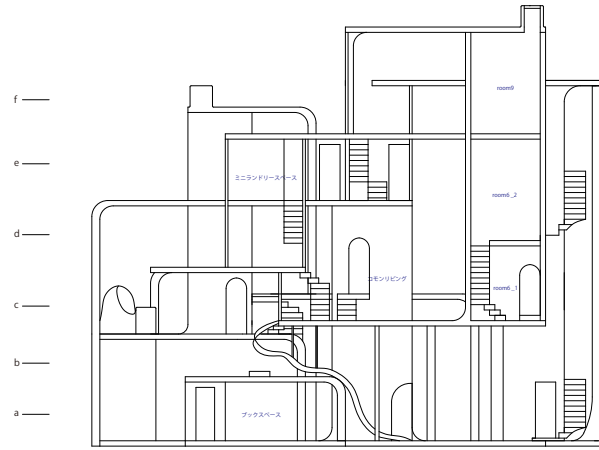


対象物が包摂物でもあるような



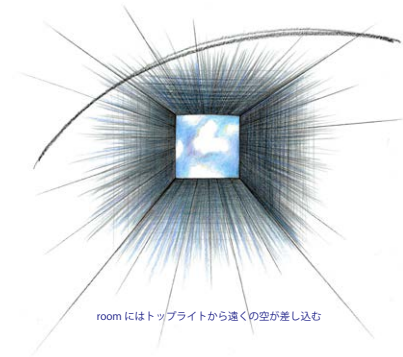
建築が、人に使われ、親しまれ、そして遠く存在でもありたい





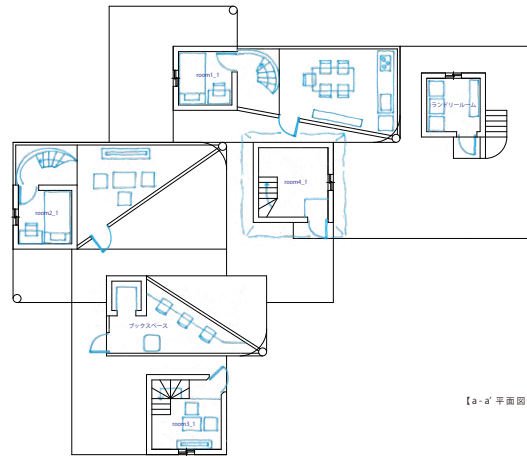
【x-x' 断面図】

【f-f 平面図】



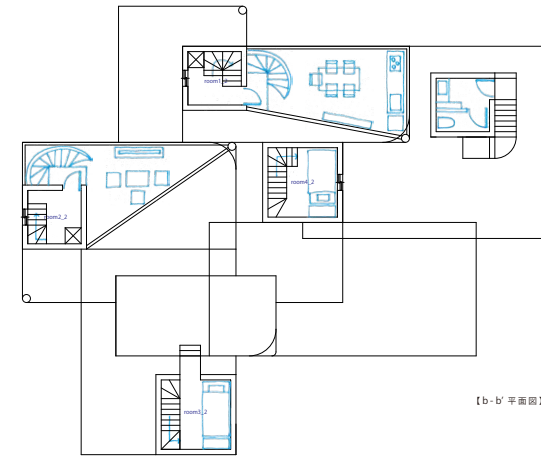
room には トップライトから遠くまで空が差し込む

x —



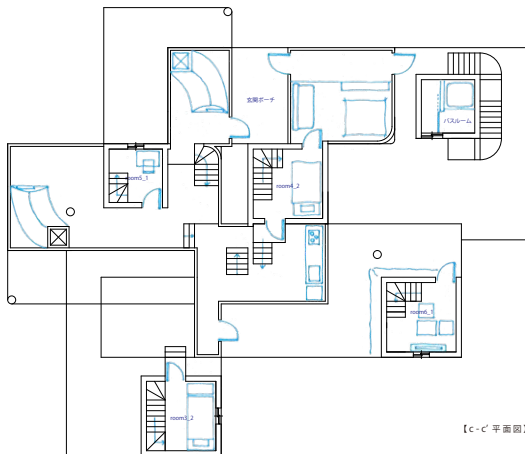
【a-a' 平面図】

— x'

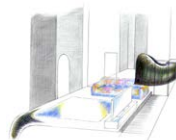


【b-b' 平面図】

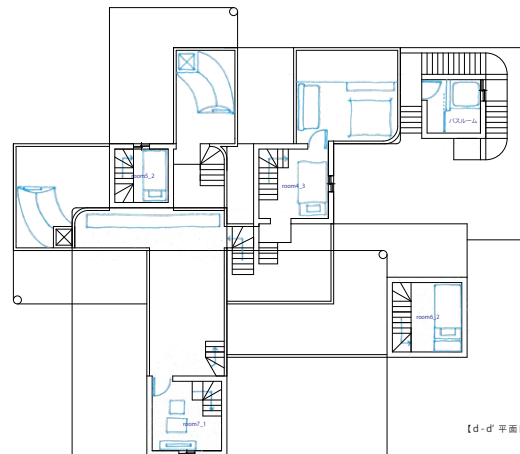
4



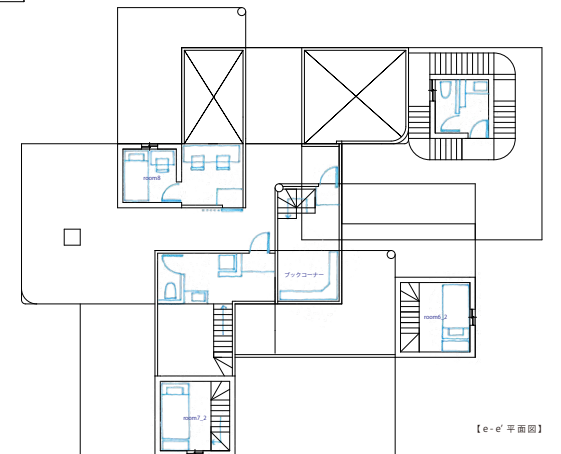
【c-c' 平面図】



玄関ポーチの様子



【d-d' 平面図】



【e-e' 平面図】